

## 「銀杏の紅葉を観て思ふ」

東京医療センター 臨床研究センター(感覚器センター)

角田 晃一

私の勤務する東京医療センターからの眺望は、西に桜と銀杏に包まれた駒沢公園を眼下に富嶽を望み、この時期（冬）は仕事を終えた日没時に人々は思わず魅入り、西の地平線に向けスマホを構える最高のロケーションである。その管理棟入り口には太くて大きい銀杏の大木が5本並んでいる。見事な銀杏で美しく黄金に色づき、遠くからみるとその全体の形も含め青空と管理棟の白い建物とマッチして素敵である。

その美しさの陰で、その足元は大変な状況である。その実が転がり、ひとたびそれを踏めばあまり歓迎できない香りが靴の裏に付着しひどい目に合う。単純に落ちていれば掃除も簡単かもしれないが、近隣の善男善女が集まりその実を拾う。葉っぱだけ残してきれいにすべての実を持って行って戴ければ助かるが、選り分けするためか、きれいな葉っぱと破壊された実が混在、そこに車は通り、実は残り大変な状況である。この時期になると毎日担当の職員が、風が吹けば常に落下する実と、破壊された熟れた実を掃除する姿は、修行する僧のようでこの時期はとくに頭が下がる。

銀杏の実でふと連想したのが御手洗いである。病院のトイレはいつも担当の方が同じく寡黙にきれいに掃除をしてくださる。わたくしの勤務する臨床研究センターのある管理棟は、古い建物のためトイレの入り口には扉が付いていて、掃除の際は必ず男女トイレの入り口を全開にして、その中にある便器や個室の掃除にあたっており、私はこの姿を見て流石プロ、といつも感じる。近年トイレの入り口は基本

的に扉がないはずである。私は感染症の、ましてやトイレの専門家ではないが、おそらく感染症の拡大を防ぐ目的でトイレの扉は取り払われたと考える。

男子トイレを使い始めて50有余年、子供の頃から「石鹸で手を洗いなさい」、「ハンカチを持ってきなさい」など小学校の先生や保健係から厳しく指導され育ちつつ、常に疑問に思うのは手を洗わないお友達が扉をいじって出ていくことである。どんなに手をきれいに洗って備え付けの紙や、ご自身のハンカチーフで手を拭いても、最後に扉があるとそこから脱出するためには扉を引くなり、押すなり、ずらすなりしなければならない。汚染された扉を最後に触れては元も子もない。（その意味で小中学校のトイレの外に必ずあった流しには助けられた。）

その後、今から30年以上前に法事があり、お寺の建物のトイレを利用した。都内に武蔵野市吉祥寺がある、その名の由来になった本駒込（昔は文京区吉祥寺）にある曹洞宗の諏訪山吉祥寺である。由緒正しい寺だと聞かされていたが、トイレに入ろうとして目を疑った、自動ドアであった。早速自動ドアのスイッチを押して侵入し、用を足し石鹸で手を自動水洗で洗ったのち手を清潔にし、トイレから出ようとした刹那、センサーで扉が自動で開いた。その瞬間、子供の頃からの不安が解消された、「トイレの後、そのまま寿司を素手でつまめる状態」である。

医療の読者の方々には、そのような方はいまいが、ひとたび街に出て高級レストラン、スーパーマーケット、映画館、はたまたカラオケ屋、パチンコ屋、ゲームセンターでも、扉のある少なくとも男子トイレを見るたびに思い出して欲しい。男子たるもの「誰もが手を洗っている保証は無い！」

この伝統？が、あるいはその後のつり革、自動販売機、エレベーターのスイッチ、握手などを通じて感染症に対する耐性を知らず知らずに高めていたかも知れない。

知らぬが仏かもしれないが、吉祥寺の先見の明を称えたい。東京医療センターの最寄り駅は駒澤大学であり、駒澤大学はあの吉祥寺の「学林」が発祥である。

最後に、わたくしは潔癖症ではない。